

短歌

今泉洋子審査員

本年度の応募者数は一般が89名、ジュニアが47名で、全体的に昨年より数名減少している。ジュニアは高校生名61名、中学生256名、小学生150名で、中学生は減少したが、高校生16名、小学生が101名増加した。

今回は60回記念で、秀作の最上位に特別賞が設けられた。

一般の部は、コロナ禍も3年が過ぎコロナの歌は少なくなってきたが、ロシアのウクライナ侵攻の影響で、作者自身の体験や両親や祖父母の体験を作者に引き寄せて詠んだ戦争の歌が多く寄せられた。また激動の現代の生活に根ざした歌などに響く作品が多く選考に苦慮したが、独自性や一貫したテーマ性のある作品に注目した。残念だったのは、不要な題をつけたり文法や漢字の間違いも少なくなかった。提出の前に、いま一度辞書を引いて確認して頂きたい。

ジュニアの部は、殆どが初心者だと思いが先生方のご指導のお陰で、学校生活や自己の内面を見つめる歌など生き生きとした作品が寄せられた。小学生の応募者の増加が著しく、今後に期待したい。巷(ちまた)では昨年発表されたカードゲーム「57577」大ヒットしていて、学校の授業で行った先生もいるらしい。このゲームで小学三年生が初めて詠んだ歌が話題になった。きっかけはどうであれ、自ら歌を詠む事によって歌を身近に感じて楽しんで欲しい。

一般の部

1席 北祐二郎 平和記念館での実体験を「B29とスマホ」や「ゼロ戦と現代の子ら」など戦時と現代を比較しつつ、特攻兵の精神性の高さなど「特攻」というテーマを色々な視点から詠んだ作品。一首一首の完成度が高く、構成力も優れていて審査員全員が最高点をつけた。

2席 筒井孝徳 五首に「ウクライナ」「アゾフスタリ」「キーウ」「クリミア」「ロシア」の地名を入れた時事詠であるが、短歌の韻律にのせた一編の詩のような連作。固有名詞や周到な言葉選びにより、短歌の奥深さや可能性を感じさせる異色作。

3席 池田照美 温暖化やコロナ禍など生きづらい時代を生きる作者の日常の思いを詠んだ一連。四季を壊れたメリーゴーランドに喩えた斬新な代表歌は、今回応募の全作品の中で際だっていた。

ジュニアの部

小学生 1席 5年 橋本侑奈 「ゆらゆらと」「ゆっくり」「ゆれる」が頭韻

を踏んでいて、ブランコの揺れのリズムを感じさせる。「いつもだれかを笑顔にしている」の表現も見事。

中学生 1席 2年 荒金詠 コロナ禍になって3年が過ぎ、中学2年の作者は中学の新しいクラスメートのマスクの下の素顔を知らない。いつまでマスク生活続くのかという不安な気持ち伝わってくる。

高校生 1席 2年 松本紘 思春期の鬱屈した感情が、それぞれの歌にストリートに表現されている。代表歌は、「誰にも見えない誰かの線引きが」謎めいていてシュールな感覚の歌。